～地域が元気になるために社会資本ができること～

社会資本の整備と活用を通じた地域づくりフォーラムから　Ｐａｒｔ２

今回は、全体ディスカッションをご紹介。
県内各地の 4 つの事例発表の後、発表者を始め皆さんで全体ディスカッションを実施しました。次から次と話に花が咲き、あっという間の１時間。
話はまだまだ続きそうな雰囲気ではありましたが、次回に続くということで・・・来れなかった皆様に、もう一度聞きたい皆様に、概要をご紹介します。

パネラー

○コーディネーター
　ＮＰＯ法人いわてＮＰＯ－ＮＥＴサポート
　高橋敏彦　さん
○　アドバイザー
　ＮＰＯ法人田沢湖ふるさとふれあい協議会
　田口久義さん
○夢が広がる花の駅構想発表者
　千厩町第 13 区自治会　藤野眞雄さん
　千厩土木センター　小野寺泰男さん
○地域が守り続ける御所湖広域公園発表者
　ワイワイ手つなぎプロジェクト三浦英夫さん
　盛岡地方振興局土木部　　下川憲さん
○みんなで作った万世橋　水と緑のみちづくり
　計画発表者　北上市役所　鈴木善一さん

〈高橋〉　パネルディスカッションでは、協働という視点で社会資本整備あるいはまちづくりを考えた場合、それを効果的なものにするためにどんな方法があるだろうというところが、見えてくればいいのかなと考えております。ぜひご参会の皆さんに、パネラーの地区の活動の一端をおみやげに持って帰っていただければありがたいと考えています。

会場の参加者から
〈参加者〉　テーマが社会資本ということで私もかつて携わった経験があります。今、社会資本と地域がどのように連携されているのかということを、もうちょっと知りたいと思い参加しました。

〈参加者〉　私は一般企業に属しておりＮＰＯ活動で防災関係にも携わっています。予算がないという中で実際に成果は出していかなければいけないという環境だと思います。そういう中で皆様方はどういうふうに活動しているのかをお聞きしたいと思って参りました。

〈高橋〉　事例発表では、自治会あるいは市民活動団体が行政と関わりを持ち始めて、あるいは協働し始めたといったご報告が多かったと思います。
　最初の質問ですが、現在、それぞれどういう役割を担っているのか、また、協働だから今まで来れた、あるいは一緒でなければできなかった、そういったことをご報告いただければと思います。

高橋コーディネーター

〈小野寺〉　まだ構想が固まっておりません。生まれたばかりです。地域の団結する力が強く、ここまで花壇が続いてきたという歴史もあります。地域の下地があったと考えていますが、それらを地域の発展に繋げるために構想を作っています。
　行政の関わりでは、約束ではありませんが、簡易パーキングを作るなど制度の許す範囲で地域に協力していきたいと考えています。

〈藤野〉　自治会の中で取り組んでいます。予算的には約 90 万です。ただ花については、特別会計にして取り組んでいます。
　自治会を 63 年に結成しても、なかなかふれあいがなく、「いくら会長さんが音頭を取っても人が出てこないよ」ということで、ふれあいを求めて始めたのがふれあい花壇の取り組みです。
　平成７年に自治会長さんが 70 代の方から急に 40 代の方になり発想の転換があって、「やはり人を集めるには何かがないといけないな」ということで起爆剤に花壇に取り組んだということです。
　人が集まってくれば今度はマスコミの方が結構出てきます。ＮＨＫ、民間放送、地元の新聞屋さんも結構来て、色々と取り上げてくださいますと黙っていても宣伝になるんです。来た方も「私もテレビに映った」とか「新聞に出た」とか、そういう相乗効果が出てきます。その間に、県から全国から表彰も受け、「やめるわけに行かなくなったよ」ということになりました。
　そのうちに黙っていても観光地になってしまい、

駐車場を造ってもらって、来る人たちを何とか捕まえて花の駅構想に発展させようということで、16年に増田知事がおいでになった時に、地元の要望として取り上げていただきました。

〈鈴木〉　私は、北上市の下水道課の職員で、普段は下水道工事の設計積算と工事監督をやっています。たまたま工事の担当だったという所がスタートです。

どうやって計画を作っていけばいいかというノウハウがあまり無く、あちこち聞いてワークショップを開くことから始まりました。現在では、「そこに住んでいる人たちの意見をどう反映させれば良いものができるのか」ということを考える立場になっていようかと思います。

協働でなければできなかった事の一つに、広瀬川が、国交省が認定した日本風景街道のモデルルートに選ばれていることがあります。モデルルートに応募した時には、高橋敏彦さんの「いわてＮＰＯ－ＮＥＴサポート」が中心となって、地域の区長さん、料理店組合の方々などをまとめていただきました。

今は「今後どういう維持管理をしていけばいいのかな」というために先進地視察などをしています。

このようなまとまり方は、ワークショップ等を行って協働でやってきたという一つの成果でもあろうかと考えています。

〈高橋〉　私も関係していますが、こういう動きがマスコミ等で報道されます。日本風景街道については、今までの活動の成果を少しまとめてみましょうということが応募のきっかけになりました。指定されたことで、「ソフト事業に今年度100万つけましょう」と国土交通省から言われました。それを元に住民の皆さんでどう活用していこうか、今度できるのが地面だけですので、その後自分たちが持っている建物とか樹木とかをどう景観づくりに生かしていこうか、というような話し合いや実際の行動に発展していくような仕掛けをしているところです。

〈三浦〉我々のプロジェクトと御所湖広域公園での関わりということでお話しします。公園というハードウェアを私たちがうまく活用させてもらっているのですが、タイムリーな指摘ができるのが私たちの強みなのかなと考えています。

365日のうち１日だけ状態が悪いときがありましたら、その１日にそこに来たお客様にとっては「ああ、あそこの御所湖って駄目な所だっけ」ということになってしまいます。どれだけ努力しても他の364日は全然関係ないんです。そういった、たった１日があるためにそのエリアの評判が落ちる。強いて言えば、繋温泉ですとか手づくり村とか小岩井農場の評価が落ちるということに繋がりかねない話です。

これらに対して、御所湖広域公園の管理者の振興局に逐一報告及び是正を求めるといったようなことを私たちが担っていると思います。

それから、協働の効果、これは行政との関わりだけではなくて、繋温泉・手づくり村・小岩井農場の三者の中でもそうですが、情報の共有ができたというところが一番大きなポイントだったと思います。

向く方向はエリアや企業で違うのは当然ですし、民間と行政ではちょっと向く方向も違うんでしょうけれど、少なくても課題の認識というのは皆の頭の中に描くことはできる。あまりズレが無くやりとりができる。この辺が協働で一番効果的な部分ではなかったかと考えています。

〈下川〉　御所湖周辺は、まずダムが整備され、ダムの回りの環境を守ろうと広域公園がその後に整備されました。国が整備して周辺を県がやるというような縦割りがあったんです。でも、それらだけではなく小岩井とか繋温泉観光協会という人たちとも御所湖周辺をもっと活用しようということで、色々な意見交換を通してネットワーク強化や色々な案が出てきた。そしてそれをワイワイ手つなぎプロジェクトさんと協働することを通じて、公園の利活用、利用者の増という格好につながっていると思います。

県としては、国と県と地元住民、地元企業の人たちなどと一緒に、公園利用者の増加と地域の利活用につながる活動をしていきたいと思います。

〈高橋〉　公園が完成しているわけではないとのことですが、これからの計画等に今参加されている各団体の皆さんの意見などは、どういう形で反映されるのでしょうか。

〈下川〉　町場地区という10ヘクタールの未整備の地区がありまが、そこについても平成15年にワークショップや懇談会とか、地元の人たちや企業等を巻き込んで基本計画を策定しております。

ただ、公園整備だけではなくて、いまある公園をどうやって利活用していこうかということをワイワイ手つなぎプロジェクト（以下「ワイプロ」）さんと考えています。

〈高橋〉　３つの計画ともまだこれからできあがりつつある市民団体のネットワークと一緒になって計画していくということ、協働の効果として上がってきている情報の共有がうまくできているという

こと、それからネットワーク強化というようなことが出てきています。

そして、住民の皆さんが一生懸命活動していることによってマスコミにのせてもらう、それによって事業の後押しをしてもらえるということもいえるようです。そういうところが市民が参加して、あるいは市民が自発的に活動していくことのメリットであると思います。

続いて、今まで活動されてきた中で、一緒に活動を進める中でうまくいかなかった部分があれば教えてください。

〈下川〉　御所湖では、公園利用者があまり伸びず、ＰＲが不足しているという課題に対して、地域活性化調整費を使い、どうやって地元の人たちと協働しながら公園の利活用とＰＲをやっていくかを考えました。ワイプロさんの御所湖周辺のネットワーク、ＰＲ、そういった強みを一緒にやっていきたいという本質的なところが一致していたためにうまくいっているのかなと思います。ワイプロさんと最終的な目標はやはり違いますので、その部分をどのように結びつけて一緒に協働していければいいのかなと考えています。

〈三浦〉　活性化調整費などですと必ず期限が決まっています。期限までに事業を終わらせなければならないという足枷ができますので、「本当はもうちょっとやれば、もうちょっと違うことができたのにな」という部分があります。期限にあわせるために仕方なくこれで終わるという部分も正直ありました。

あとは短期間で終わらせるためには、マンパワーが必要になってきますが、最近は特に旅館業は元気が無くて、「各ホテルさんから従業員何人出して」というのが適いません。すると、ある程度少ない人数で事を進めていくことになり必ず時間がかかってしまう。時間がかかってしまうと期限まで間に合わない。期限まで間に合わせるためには最後はやっつけ仕事になる。理想的には補助事業ではないやり方がないかなと考えています。もう少し長いスパンで物事を見るような方法があればいいなと思います。

また、消費動向は２年３年先がどうなっているかわからないというのが現代です。あまり長いスパンで見ると、今度は始めたことが３年後に完成した時には全く消費動向にあっていないということもあり得ることです。この辺はもっと真剣になってみんなで考えなければならない点だと思います。

もう一点。ワイプロは、３者で事務局を持ちまわっています。事務局の年は何かと連絡とか、書類を作成しなければならなず、事務局が主導してやるとなると、どんどんやれることが制限されてしまいます。何かやるときのフォローアップ体制というのが行政であるととても助かると思います。

〈鈴木〉　ワークショップというのは参加者集めが一番厳しいところです。公開方式なので出たい人はみんな出られるんですね。ですが「じゃあ、お願いします」って言ってやっても、多分一人二人しか来ないこともあり得るだろうということで、自治会とか料理店組合だとかにお願いをしています。するとその人達は自分達の利害などもありますから割と積極的に出てきて貰えます。そうすると、毎回同じ人たちで固まった話になっていってしまって、本当にそれがその地域全体が望んでいることかどうかが見えにくくなってくるという側面があります。

通知も千通とか出すんですが、なかなか参加して貰えない。本当にそばで住んでいる人もなかなか参加してくれない。それをどうやって改善していけばいいのかというのが目下の課題です。

〈高橋〉　北上では、広瀬川のワークショップの前から中心市街地が駐車場だらけになっていたり、シャッターだらけになっていたり、そういったところを問題にして景観点検のワークショップをしてきました。その時から集まってくる人たちはほとんど同じ人たちが集まってきます。

ただ、そういった人たちが今、思いを強くしてこれからそこの町づくりをするときに活躍してくれるんだろうと考えています。飲屋街で会うたびに「次はこういう意見を言いたいです」と自分の希望を言ったり、何かやりそうな雰囲気が出てきていますので、期待はしています。それをいかに参加してくれていない人たちに伝えるかで、鈴木さんなどが苦労して新聞を作ってみんなに配っているところです。やはり情報発信はどこでも問題になっているのではないかなと思います。

〈藤野〉　私の方は花ですので、大きな課題は作業です。年間通じての花の手入れにどのように人を集めるかが大きな課題です。色々若い方にお話ししてもなかなか出てこないので、年配の方や女の方がやはり良いのかなということで取り組んでいます。ただ、今出てきている方々が果たしていつまで続くかなという大きな課題があります。

今後は花の駅構想とこの 13 区自治会のふれあい花壇をどのように結びつけていくかという大きな課題が残っています。

２つ目は予算的なこと。当初はあまり予算がなかったのですが、今現在で 50 万くらいの花の苗の販

売をしております。その費用の中で、なんとか年間を通じたやりくりをしています。花の駅構想の中で、今度は色々な花の苗を更に販売しながら取り組んでいこうと考えています。

パネラーの皆さん
発言しているのは、藤野さん

〈高橋〉　各地区でも人が出てこない悩みを抱えていると思いますが、コツのようなものがありますか。

〈藤野〉隣組が約 10 グループくらいあります。毎年組長さんが交代になりますので、その方を中心にして当番制でやっています。核となる方が高齢化もしておりますので、なんとかその辺を育てたいと考えております。若い団塊の世代の方をなんとか集めてやろうかなという考えはあります。

〈小野寺〉　行政側の課題として３つほど。地域と一緒に事業計画を作ろうとした場合に、地域に回答できないことです。予算の流れと同様に県庁、国交省でＯＫといってくれないと「それをやりましょうか」と答えられないということです。これは制度上やむを得ないことであると思いますが、これが一番時間がかかりネックだと思います。

もう一つは、予算。本来、事業が始まって計画をつくることになるわけですが、事業が始まる時にはもう計画ができております。そうすると形式的な住民の説明会という事は可能であっても一緒に計画をつくっていくということは困難です。私どもの場合は県単の橋梁調査費というのを使いましたが、県の予算の都合上、来年度着手が確実でなければダメだとか、色々な条件が厳しくなってきており、工夫しながらやっていかなければいけないと思います。

もう一つは、地域の皆さんと計画を進めますと、どうしても事業費が高い方へ行ってしまう。冠水対策ということで、今回の場合も施工区域が伸び、増額する方向に行っています。冠水対策を別に投資したらという別の角度から見ると、決して高い投資ではないことを説明できるのですが、要望を聞けば聞くほど段々事業費が嵩んでいくとのが課題です。

〈高橋〉　広瀬川の事例を取ってみますと、困っている時点で市の幹部の方が少し市民活動団体にリークするわけですね。「困っているんだ」「なかなか進まないんだ」と。「住民の皆さんに声をかけたいんだけれど、なかなか決まらないので声をかけれないんだ」という情報だけを私達は貰ったわけですね。情報だけ貰って「じゃあ、どうしようか」って考えながら別の予算を・・地域活性化調整費の方に相談をして、本体の予算が付く前に住民の皆さんが参加して、希望・要望あるいは計画に参加できる事業を組み立てました。別な形でなんとかできる方法もあるのかなという感じもしています。

それでは、一通り課題が出されましたので田口さんからアドバイスをお願いします。

〈田口〉　大変大きい問題です。整理しますと事業の目的それから予算。それを最終的に使いこなしていく部分でみんな同じような問題・バリアがあるように思われます。

小野寺さんは、合同の企画・実行は予算の関係上無理だと、最終判断は国交省だと。その辺のところはどうしても今の制度上問題になるかと思います。

鈴木さんは、ワークショップの参加者不足とその改善が課題。これはどの団体もそうだと思います。

秋田には鷹巣から角館に建設中の鉄道が開通しましたが、今では旧市町村に払い下げされ、管理を任されています。実は赤字が赤字を生んで、２年後に廃止しようという話が出ていました。私どもがＮＰＯを立ち上げると同時に、なんとか底上げを図って欲しいという話があり、わらび座と企画を練り上げ２泊３日のモデルツアーをやりました。

紅葉が真っ盛りの10月の末から11月の頭にかけて２泊３日で募集人数は 40 名、お座敷列車を貸し切りました。たまたま河北新報に取り上げられ、たった４日で満杯になりました。注文していたパンフレットはどこへも出さずに定員になりました。

そうしたら県の方で「そんなに盛況だったらもう一両貸し切ったら」というんですね。こちらでは予算がなく無理と言ったら、「電車は全部県で貸し切る」ということになりました。私どもはお客さんを呼んで、７つの駅からお酒やら漬け物やら地元の「ごっつぉう（ご馳走)」を持ち込みました。各地元の婦人会やら何やらが作ってですね。それがたいへん好評を得ました。

ちょうどその日、内陸線再生会議というのを阿仁

の駅舎の中の会議場で、県の偉い人たちが集まってやっていたんですね。ちょうど会議が終わった場所へ我々が乗り込んでいったんで、「阿仁にこんなにお客さんが来るとは思わなかった」ということで、更に大成功裏に終わったんです。

まず行政と私どもと、内陸線の会社と、お互いに常に危機意識を持ちながら、行政がダメなら民間、民間がダメなら内陸線ということでボールを投げ合いました。投げ合って受けた所ではその人達が絶対的に責任を持って企画を練りあげて、ダメだったら次に持っていく。結局、それぞれの考え方に立脚した元に一つの目的を仕上げたという事が成功の秘訣だったと思います。

やり方は違うんだけれど大体同じ所に行き着く。関わり合った人たちはそれぞれ責任を持ってやる。どうにもならなかったら、議論したことを、そのプロセスを持っていって他の団体にぶつける。それでダメなら参加している組織・同士が最終的に本音で話をした方が良いんじゃないのかと。私どもはそうしてやったら結果がついてきました。

〈高橋〉　課題が出され、田口さんのアドバイスをいただいたところで、今後、地域の皆さんが夢を見ていること、これからやりたいと思っていることを発表して頂きたいと思います。また、行政にあるいは企業に団体にお願いしたいこと、やって貰いたいこと、そういったものがあれば合わせて発表してください。

〈下川〉　今後の展望として、御所湖の周りのネットワークの強化ですが、それぞれの垣根を越えて、本気で地域活性とか利用について話し合うことが一番大事なのかなと思いました。

行政・住民、企業の人たちでそれぞれ役割があるんですけれど、それぞれの知恵と工夫みたいな案を出し合って「これいいね、これをやっていきたいね」という話になって「じゃあ、それを実際どうやっていこうか」というふうにやっていきたいと考えています。

〈三浦〉私達の会そのものが、そんなに強い繋がりではないですし、年間の予算も合わせて10万程度なんです。また逆にそれが今までやってこられた秘訣じゃないのかなと考えているんです。それは今後もずっと継続していきたいなと思います。

あとは行政のほうとも、一時的にガーッと盛り上がってすぐしぼんでも困りますので、緩く長く繋がれるような方法を模索していきたいなと考えています。本音の付き合いができるような形をこれからも取っていければと考えています。

〈鈴木〉　正直なところ、計画段階では大体軌道には乗ったと思っています。問題になるのは、造った後その施設がどうなるかというところです。「日本風景街道の予算で先進地視察をしてこよう」といったような所から、それを起爆剤として、ワークショップに参加している色々な団体の方々が今度はそれを使う立場として緩くまとまっていけばいいなと思っています。

〈藤野〉　大きな夢があります。花の駅構想が5年後に完成する前に、自治会で勉強中です。お母さん達を中心に畑の学校というものをつくり、安全なものを作って産直で売ろうとしています。「あそこの場所に行くと必ず安全なものを売っているよ」という情報発信の場所にしたいと。

二つ目は、花を中心にしたイベントです。今年も花の中でコーラスを行いましたが、結構好評で来年もやろうかなという話が出ています。

三つ目は花の駅の中に特徴のある農家レストランを造りたい。あまりお金をかけないで手軽に利用できるような財政づくりも必要かということです。

活動は、花の駅構想委員会というのを立ち上げまして、行政の指導を得ながら進んでいます。5年後には花の駅が完成し、私たちもきちんとしたイベントができるようにお願いしたいです。

〈小野寺〉こういった形式の協働の今後の展望を考えますと、大変先行きは暗いだろうと考えています。予算的な問題があります。

もう一つはどうしても手間がかかります。だから単価の高い行政にならざるを得ないと思います。県の職員というのはどうしても直接市民の所に入るノウハウをあまり持っていません。従って、これをなんとか生き残らせて、市民と一緒にものを作りあげていくノウハウを育てるまではいかないかもしれませんが、維持はさせなければいけないというの

がこれから先の展望です。

あとは施策への提言ですが、この花の駅構想の場合には、藤野さん方に最終的に地域振興に繋げていただかなければ成果とはならないわけです。いつも言っているのは「投資を最小限にしていただけませんか。最初は柱が４本だけあって屋根だけあればいいんだから。失敗したらすぐ撤退すべしス」ってやっているんですけれども（笑い）是非成功させていただきたいです。

〈高橋〉これからの展望をお話しいただきました。活動を維持する、あるいは協働体制を維持するにも予算というものが影響してくると思います。その中で、ほとんど自分達のビジネス感覚で事業を続けてこられております。これからのまちづくり、協働において自治会であれＮＰＯであれ、自立という形が求められてくるのだろうと思います。最後に田口さんのほうからアドバイスを頂ければと思います。

〈田口〉　田沢湖はここからたいへん近く、よく奥羽山脈 46 号線を越えて御所湖周辺には孫を連れてきます。すると、特に去年・一昨年から毎年どこかが変わっているんです。この人達と地元の人たちと繋温泉含めていわゆるハード面・土台をつくっておったということに今日はたいへん感激したところです。

また同じようなところで同じようなものをそれぞれ岩手県全体でやっておられるようです。それは本当に頑張っているなという気がしました。

先程、農家レストランの話が出ました。私ども、どうしても農家民宿になるとフロントが農林省になっています。日本における農林漁業体験は一元化管理を農林省がするみたいな法律ができましたが、そちらの方の助成金もあります。国交省がダメなら農林省、農林省がダメなら総務省。こちらも幅広く進んでぶつかってみてはどうでしょう。４本の柱を作って屋根作ってダメだったらやめようということでなくして、ね。（笑い）母屋の下に下屋を作って、下屋で母屋を乗っ取るような気持ちで進めていったらよろしいかと思います。

ちなみに私どもは 46 年に民宿が始まって、57 年に体験学習が入ってきました。受け入れ学校が 20 校過ぎた時に、私一人にはとてもじゃないけれど手に負えなくなった。旅行社との折衝、学校の先生との交渉。20 校を越えた頃には一人十色になってきたんです。それを行政にお願いしに行ったんですけれど見事に全部蹴られました。役場の観光課に行きました。「田植え？稲刈り？農協では」って言われたんです。農協へ行ったら「宿泊？」と取り合ってくれません。観光協会も門前払いなんです。

しようがなくてやっていたらたまたまグリーンツーリズムという聞こえの良い言葉が出てきて、みんながワーッと飛びついてきました。

たまたま一生懸命みんな手探り状態でやったことが逆に今度は自信に繋がったんです。とにかく一生懸命やって誠意を見せて、それが年を重ねると今度は逆に自信になって。自信というのは自分の心の中にしっかり留めておいて何かあった時にはそれをフルに活用する。それが強みになってくる。それが地方に、自治体・地域住民に広がると地域おこしに繋がっていくと思うんです。

ですから、一人一人の心構えとやる気ですね。地域住民の手を繋ぎあった協働。行政、民間の会社、そのことを目的とした人たちの集まり。

今日のフォーラムは逆に私が大変勉強になりました。御所湖がきれいになったのも、この人達のおかげでした。今日はどうもたいへんありがとうございました。

〈高橋〉　最後は田口さんにすべてまとめていただきました。「一生懸命頑張れば財源を含めて資源の出口、窓口は一つではないよ。諦めずに住民力、そして協働で頑張ってください」ということだと思います。

ここにいらっしゃる市民活動団体、ＮＰＯの皆さん。是非行政と協力しながらそれぞれの地域地域で頑張って夢を達成していただければと思います。